
犬とファンデーション

紺野 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬とファンデーション

【Nコード】

N6804Z

【作者名】

紺野 蒼

【あらすじ】

一人暮らしの（自称）寂しいOLである秋代。

自宅マンションの入り口で秋代を待ち構えていたのは、運命の出会い？

出会い（前書き）

軽いノリで書いています。

間違った知識があるかと思いますが、生温かい目で見守って下さ

い m ((m

出会い

第一話： 出会い

それが何なのか、秋代あきよには最初はわからなかった。

「……こいぬ？」

入り口と非常口のオートロックの扉は、鍵がなければ外からは開かない。そんなマンションの六階の廊下。

自分の部屋の前に、盛さかんに尻尾を振る小さな茶色い生き物。動物OKのマンションとはいえ、自分で飼っているわけでもないのに、誰がこんな状況を想像できるというのだ？

おそらく雑種。ふわふわの毛足と太い手足、全体的に薄茶なのに鼻面と眉と尻尾は黒い毛並み、ゴムパツキンのような口元。ゴールデンと何かの合いの子だろう。

自分を見上げて嬉しそうに、笑み崩れているような顔で、盛んに尻尾を振っている子犬を抱き上げる。

仕事帰りで疲れていた頭は、思わぬ訪問者を受けて、スーツを着ていることを忘れ果てた。

「お前、何処から来たの？ このマンションの子？」

顔中のファンデーションを嘗なめ取る勢いで、顔中をペロペロと小さな舌で嘗め回す子犬に、秋代は笑み崩れた。

元々が動物好きで、いつか動物を飼うつもりで、このマンションを購入した秋代だ。子犬の魅力に勝てるはずもない。

「警戒心なさ過ぎ。獣の本能はお母さんのお腹の中に忘れてきたの？」

笑う秋代に喜んだのか、子犬は更に嬉しそうに顔を嘗め、仕舞し舞いには鼻に噛み付いてきた。

「イタツ。こらっ。あたしの鼻は食べられないわよ。そんなことすると……たーべちゃーうぞー」

子犬の鼻面を掴んで口を閉じさせると、秋代は大きく口を開けて、

小さな鼻面をハクリと銜くわえた。

「あの……食べないでやってください」

後ろから掛けられた突然の声に、秋代は驚いて飛び上がった。

子犬が痛そうにキャンツと一声鳴いた。

「あ！ ああつ、ごめん。ごめんね、大丈夫？」

驚いた拍子に子犬の鼻面を噛んでしまったのだ。慌てて子犬の頭を撫で、鼻面を撫でてやる。

子犬は噛まれたことなど一瞬で忘れ、また嬉しそうに秋代の顔を嘗めだした。

「驚かせてすみません」

申し訳なさそうな声に振り向いた秋代が見たのは、異様に迫力のある顔と体型をした、ゴツイ男が頭を下げる姿だった。

「そいつ、俺の犬なんです。ちよつと油断したら逃げられてしまつて……」

百九十センチ近い大きな体を小さくして謝る姿は、かなり滑稽だった。

どうみても、その筋すじの方かたにしか見えない。黒いスーツに威いかついでに強面こわもての男は、子犬を見る眼だけは優しげだったけれど。

「そ……う、ですか。あの、こちらこそ、すみません。部屋の前に居たので……人懐こかつたので……その、つい」

恐る恐る子犬を差し出す秋代に、男は首を傾げる。

「犬、好きですか？」

低くドスの聞いた声と、睨み殺されそうな鋭い目付きに、秋代は考えるよりも早く素直に頷いていた。

「そうですね。実は、こいつの貰い手を……里親を探してしまして。飼ってやってもらえませんか？」

一歩踏み込んで、そりやもう秋代を睨み付けるかの如く真剣な顔で、男が訴えかけてくる。

「今日ここに来たのも、里親希望の方のお宅にこいつを引き渡すためだったんですがね、訪ねたら断られたんです。しっかり写真も確

認してもらって、今日渡しに行くと同もって連絡したのに、いきなり断られたんですよ」

腹立たしそうに眉を顰める姿に、秋代は恐れ戦きながら、

「あの、お知り合いの方では、なかったんですか？」

一応、訪ねてみた。もしかしたら……と、考えるところがあったので。

案の定、男は首を振った。

「いいえ。ネットで里親を募集しまして、今日が初顔合わせです」

(ああ……やっぱりね)

里親希望の人も驚いたことだろう。明らかに「その筋の人間です！」と公言しているような人間が、こんなに可愛い子犬の飼い主だったなんて。

「……こいつは雑種です。このままでは保健所に預けるしかなくなります。どうか、お願いできませんかね？」

実に丁寧に頭を下げる姿は、控えられているかのようで、居心地悪いうえに怖い。

「ですが……」

正直言つて、子犬は可愛い。保健所送りになるくらいなら、ぜひとも我が家に来て欲しい。しかし、この男とは係わりたくはない。

秋代は真剣に悩んでいた。

秋代が苦悩していると、小さな電子音が響いた。

「失礼」

男が小さく頭を下げ、内ポケットから携帯を取り出し、少し離れて通話を始めた。

しかし、秋代は見てしまった。携帯を取り出す時、男のスーツの下に、ホルダーがあるのを。

(拳銃！？ 拳銃だよね！？ ああ……そんな物まで持っていますか……)

「……ああ、俺だ。……なんだと？ 何処だ？ ……わかった。マンションの玄関に車回せ。直ぐに行く」

ドスの聞いた不機嫌そうな声で、会話を終わらせ、男が秋代に向き直る。

「申し訳ない。仕事が入った。とりあえず名刺を……」

男はあちこちのポケットを探って、眉を顰める。

「いけねえ、車ん中だ」

呟いて、いきなり秋代の腕を掴んで歩き出す。

「え！ あの、ちょっと……」

抵抗しようとする秋代を強い力で引き摺り、

「すまない。急いでるんだ。車まで来てくれ」

有無を言わずエレベーターに押し込む。

(さーらーわーれーるー！！ 何で都合よくこの階に止まってんのよエレベーター！)

恐怖で声は出なかったが、内心で自分が乗ってきてそのままのエレベーターにまで八つ当たりする。

成す術無く腕を掴まれたままで、マンションの玄関まで連れられて行くと、すでに車が待っていた。

その車を見て、秋代は目を剥いた。

「すまんが、ダッシュボードの中の俺の名刺入れ取ってくれ」

車の中の男がダッシュボードを探り、黒皮の定期入れのようなものを取り出した。

秋代の腕を掴んだまま名刺入れを受け取り、その中から一枚を取り出して、子犬の飼い主が渡してくる。

「俺の連絡先だ。すまんが、チビは一晩預かってくれ。明日、もう一度訪ねるから」

男から名刺を受け取って、確認する。秋代は驚きに強張っていた顔を、緩める。

「わかりました。明日は私は休日ですので、何時でも尋ねて下さって構いません」

「助かります。本当に申し訳ない」

律儀に頭を下げる男に、

「お仕事頑張つて下さいね、刑事さん」

子犬の手を振りながら、秋代も笑顔で手を振った。

赤い回転灯を点けた車に乗り込んだ男を見送り、渡された名刺に改めて視線を落とす。

「ふーん、警部さんなんだ。お前のご主人様は、あの外見で絶対に損してるよねー？」

可愛らしい子犬は、殆どファンデーションの落ちた顔を、なおも嬉しそうに嘗めていた。

出会い（後書き）

警察事情には詳しくありません。いい加減すぎる一般人の知識で書いてます。

間違っていたら、ゴメンナサイ!!

よつごそ

第二話：譲渡

春先の柔らかな日差しが、バルコニーに降り注ぐ。

十五畳ほどの広さがあるバルコニーは、レンガ造りの花壇がいくつもあり、草花が生い茂っている。二mほどもある木が三本もあり、広いはずの空間は、まさに緑が溢れるといった感じだ。

中央には木製のガーデンチェアとテーブル。

「まだ少し寒いけど、ここの方が寛げるでしょう？」

秋代は木製の椅子に腰掛け、足元の茶色の塊かたまりに笑みを向ける。

皿の上の焼き魚に夢中になっていた子犬は、秋代を仰ぎ見て、嬉しそうに尻尾を振る。

「名前、なんにしようかしらね？ 名前、もうついているのかしら？」

優しい笑みと頭を撫でる暖かい手に、まだ名の無い子犬は、嬉しくて仕方がないと言っている様に、更に盛大に尻尾を振り、秋代の膝に乗ろうとして飛び跳ねる。

「なあーによ。ご飯よりもかまってくれって？ あたしが作った干物は気に入らないの？」

一生懸命飛び跳ねる姿は愛らしく、秋代は口を尖らせながらも、子犬を抱き上げた。

「わっ。ちよっ……もう。また、顔な嘗める。どうしてそう化粧を落とすのが好きなのよ」

焼き魚よりも随分と夢中になって、薄くとはいえ化粧けいずの施された、秋代の顔を嘗め回す。

「口は…鼻もやめてよー。魚くさーい」

明るい笑い声を響かせながら、顔中の化粧を嘗め取ろうとしている子犬と、じゃれ合う。

空気の入れ替えも兼ねて、開けっ放しにしてある窓の向こうで、チャイムの音が鳴り響いた。

「あ、警部さんかな？」

膝の上の子犬を降ろし、部屋の中へと急ぐ。

藤村 眞は秋代の住む区域の、所轄署の警部だ。今現在の、子犬の飼い主でもある。

「はい。どちら様でしょうか？」

インターホンを取り、映像を覗き込みながら問いかけると、堅苦しいお辞儀をする眞が映った。

「私、K県警の藤村と申します。昨夜の件で、少々、お話が……」
思わず、秋代は吹き出していた。堅苦しいお辞儀に見合った、堅苦しい挨拶である。

「い、今、開けます。どうぞ」

手元の操作で入り口の自動ドアを開いてやり、眞の姿がマンション入り口から消えるのを確かめて、インターホンを切る。

「あんな外見なのに、礼儀正しいというか……あんな外見だからかしら？」

昨夜初めて目にした眞は、裏社会に生きている、その筋の人間にしか見えなかった。黒いスーツに包まれた立派過ぎる体格も、切れ長の鋭すぎる目の厳つい顔立ちも、ドスの利いた低い声も、それ以外の何者でもなかった。

赤い回転灯を点けた乗用車に乗り込む姿を見ても、名刺に書かれた県警と警部の文字を見ても、今も信じられないくらいだ。

コーヒーマシーンをセットしながらクスクスと秋代が笑っているのと、もう一度チャイムの音が響いた。

「はい。どうぞ」

笑みを浮かべたまま玄関のドアを開けると、昨夜と同じスーツ姿の眞が頭を下げた。

「昨夜は申し訳ありませんでした。子犬のことで、お話を……」

「玄関で立ち話もなんですから、どうぞ、お上がり下さい」

恐縮する厳つい外見の眞にスリッパを出してやり、家の中へと招き入れる。

真の声に反応して、バルコニーで魚を食べていた子犬が、玄関へと駆け出してくる。

「チビ、元気そうだな」

黒いスーツに毛がつくことも気にせず、真は嬉しそうに飛び跳ねている子犬を抱き上げた。

子犬がおとなしく腕の中に納まっているのに、秋代は首を傾げる。

「どうかしましたか？」

「え？ 何がですか？」

「いや、不思議そうな顔をしていらっしやるので」

秋代に促されるまま居間のソファに腰を下ろし、膝の上に子犬を抱いたまま、今は幾分優しくなっている眼を秋代に向ける。

「いえ、わんこ…子犬が、藤村さんの顔を嘗めないな、と思って」

「ああ、昨夜はこいつ貴女の顔を嘗めましたね。ですが、普段はあんなことはしません」

コポコポと出来上がりを教えるコーヒーマシーナの音に、カップを用意しながら秋代は更に首を傾げる。

「えーと……貴方の顔は、嘗めたりしないんですか？」

「しませんね。私に限らず、人の顔を嘗めるようなことは普段はありえません」

「私、昨日から嘗められっぱなしですけど？」

コーヒーマシーナを差し出しながらの秋代の言葉に、真は眉を顰める。

「おかしいな。チビは人の顔が嫌いなんですが…」

真が子犬を持ち上げ鼻面に顔を近づけると、子犬は嫌そうに顔を逸らす。真が何度顔を近づけても、右に左にと、顔を背ける。

「ね？ 私じゃなくても、誰がやってもこうですよ」

「どうして？ さっきだって……この子のせいであたしの化粧、殆ど落ちちゃったのにな」

納得できずに子犬を真から取り上げて、子犬の鼻面に、顔を近づける。

子犬は嬉しそうに尻尾を振り、秋代の顔をペロペロと嘗めだした。

「ほら。やっぱり、顔嘗めるの好きじゃないですか」

大喜びの証拠に、ブンカブンカと盛大に振り回している尻尾のせいで、秋代の両手に持ち上げられているまだ小さな体が、ふらふら揺れている。

「いや、そんな筈は無いんだが……おかしいな」

見たこともないほど嬉しそうな子犬に、真は首を傾げるばかりだ。テーブルを挟んで、真の正面の床の上のクッションに、腰を下ろす。元気な子犬は、床に降ろされて気に入らないらしく、秋代の膝の上によじ登り、更に顔を嘗めようと体を伸ばしている。

「もしかして、藤村さんが怖　お、男の人だからじゃないですか？　ほら、動物って、基本的に男の人を嫌がるとか、言うじゃないですか」

秋代は正直に出そうになった言葉を飲み込み、以前聞いたことのある説を口にする。

「それはないです。自分、このチビには家族の中でも一番に好かれてましてね。姉と妹が居るんですが、このチビは嫌って寄り付きもしません。顔を近づけると悲鳴を上げる始末でして」

「それはまた……こんなに人懐っこい子に嫌われるなんて、ショックですね」

「ああ、いや……」

真が気まずそうに視線を逸らす。

化粧は既に殆ど嘗め取られてしまっていたが、癖になつても困る。顔を嘗めようとする子犬と格闘していた秋代は、言葉を濁す真に、視線だけで問いかける。

「……そいつ、凄い人見知りなんです」

「は？」

「人見知りが激しくて、貰い手がつかないんですよ。里親候補なつおやこ候補が来ると、どこかに隠れてしまいました」

（今、あたしの膝の上で今度は手にじゃれ付いている、出会った当初から人懐っこく尻尾を振っていた、このフレンドリーな子犬が？）

不審な眼差しを向ける秋代に、真は苦笑するしかない。

「だから昨夜、本当に驚いたんです。チビが抱っこさせる人間が、自分以外に居るとは思ってませんでした」

秋代の手に飛び掛っては逃げ、飛び掛っては逃げ。決して歯を立てずにじゃれ付く子犬は、頭も性格も良い、欠点の無い、愛らしい子犬にしか見えない。

「こんなに懐っこいののに、人見知り？ っていうか、藤村さん以外には、抱っこもさせないんですか？」

「はい。昨夜も、里親希望の方に引き渡そうとしたら、きゅんきゅん悲鳴みたいな声で鳴き出して……。それで、断られました」

（なるほど……藤村さんの外見にびびったせいばかりじゃなかったんだ）

声には出さずに、秋代は深く頷いた。

「ですから、ぜび、このチビを貰ってやって下さいませんか？ こんなに楽しそうなチビは、初めてなんです」

真剣な真の眼はかなり怖かった。

けれど同時に、胸の中が暖かくもなる。子犬一匹のために、大人の男が頭を下げる姿は、酷く心を打つ。

「ぜび、私に譲って下さい。こんな、可愛い犬と暮らしたかったんです」

秋代の全開の笑顔に、真は一瞬息を呑むようにして、深く頭を下げた。

「ありがとうございます」

「そんな、こちらこそ。嬉しいです。一人暮らしは寂しかったんです」

にっこりと、本当に嬉しそうに笑う秋代に、真の厳つく強張っていた顔にも笑顔が浮かぶ。

じゃれることに疲れた子犬は、秋代の膝の上によじ登り、温かい膝の上で寛ぐ事に決めたようだ。

「あらためて、ようこそ我が家へ。わんちゃん」

頭を撫でる秋代の手に、子犬は嬉しそうに目を細めた。

大好きな人（前書き）

子犬視点です

大好きな人

第三話：名付け

「な・ま・え。うう〜ん……名前ねえ」

秋代ママがボクのお腹をくすぐ撫りながら、首を傾げる。

ボクは今まで「チビ」って呼ばれてた。けど、「チビ」は名前じゃないらしい。ボクの前の飼い主の真しんパパが、名前は本当の飼い主に付けてもらうほうがいいって、そう言った。

その真パパは今、ソファで寝てる。きっと秋代ママが作ったお昼ご飯がおいしかったから、お腹一杯になって、お昼寝したくなっただ。

「ポチだのタロウだのじゃ、つまらないよね？ かと言って小難こむずかしい名前にするのは、あたしが嫌だし……」

真剣に考え始めると、秋代ママの手は止まってしまふ。

それが嫌で、もっと構って欲しくて、もっとボクを見て欲しくてボクは秋代ママの手を、歯を立てないよう気をつけながら噛む。

「こらこら。あんたの名前を考えてるのよ？ あんまり邪魔するとポチってつけちゃうぞ〜う」

秋代ママがボクを転がして、くしゃくしゃに撫でてくれる。ボクはこれが大好きだ。

けど、ポチはさつき秋代ママがつまらないと言った名前。そんなの、僕だって嫌だ。

ボクは秋代ママの手から逃げ出して、秋代ママが名前を考えてくれるのを邪魔しないよう、お庭で遊ぶことにする。

この「まんしょん」のお庭は、少し変わってる。

真パパのお家の庭と違って、地面の匂いがあまりしない。お花や木が生えてるところしか、土の匂いがなくて、柔らかくも無い。お散歩するときの「どろろ」と同じような感じ。

でも、遊ぶなら、やっぱりお庭だ。虫も、少しならいるし、暴れ

ても怒られない。走り回って「かだん」にぶつかると、痛いけど、秋代ママがたくさん撫でてくれる。

秋代ママの手は優しく良い匂いがする。大好きだ！

お庭に出て、まず向かうのは「れもん」の木。黄色い実がなってるけど、ボクの大きさじゃ届かないのが残念。大きくなったら、あの黄色い実を取って遊ぶつもりだ。今は「れもん」の木の何処まで届くか、ジャンプして葉っぱにじゃれ付いて遊ぶのがお気に入りに入り。

「れもん」に厭きたら、次に向かうのは「かだん」だ。ここは背の低い花とか木があって、かくれんぼに最適。時々ちようちよが飛んでくるから、それを捕まえるのも、凄く楽しい。

お庭に転がってるボールで遊んだり、噛み付くと鳴くおもちゃで遊んだり。やらなきゃいけないことがたくさんあって、とても忙しいけど、楽しい。

最後に向かうのは、梅の木。これは真ぱのお家にもあったから、この木の下にいとると落ち着くんだ。だから、ここは休憩場所。ここにくると、いつも眠くなってきちゃう。ボクを産んだお母さんとよく梅ノ木の下でお昼寝したから、そのせいかな？ お母さんがいないと、少し寂しいけど。ボクはもう赤ちゃんじゃないから、仕方が無い。

けど、僕はもう知ってる。ここで寝ると、なにより、起きる時が楽しみなんだ。

だから、梅ノ木の下はボクの大好きな、お昼寝場所。

「またここで寝てる。本当に、この場所好きよね」
大好きな声が聞こえる。

「何でわざわざ土の上かな？ 汚れるじゃないのよ」
ほら、優しい手がボクを抱き上げてくれる。少しぼんやりする。
まだ眠いから。

「藤村さん、帰るって。お見送りしないよね」

しょぼしょぼする眼を一生懸命開けると、大好きな秋代ママの顔が、直ぐそばにある。

ボクは嬉しくって、秋代ママの顔を嘗める。秋代ママはボクの大切な一番の人になるって、ボクは最初から知っていたんだ。ボクの勘はきつと外れない。だって、今でも秋代ママが、こんなに好きなんだもの。

「すいませんでしたね。徹夜明けなもので……」

まだ眠そうな顔で、真パパが頭を下げる。真パパは「けいじさん」だから、泊まりとか徹夜とかが多い。だからあまり遊んでくれない。不満だ。

「お疲れだったんでしよう？ 構いませんよ。どうせ私一人の部屋です。誰に迷惑がかかるわけでもありませんから」

秋代ママの優しい声で、真パパが少し笑った。珍しい。真パパはボクのお母さんとボク達兄弟にしか、あまり笑って見せないのに。

なんとなく悔しくて、ボクは秋代ママの腕の中から降りると、真パパの足が履いてるスリッパに噛み付いた。

真パパはボクの攻撃に嬉しそうに笑って、抱っこしてくれた。満足だ。

「名前は、決まりましたか？」

真パパの手がボクを撫でてくれる。

「ええ。梅ノ木が好きみたいだから、プラムにしようと思うんです」「可愛らし過ぎる気もするが、良い名前じゃないですか」

「じゃあ、プラムに決定ですね」

秋代ママが僕の頭を撫でてくれる。

「お前の名前は、今日からプラムよ。よろしくね、プラム」

意味は良くわからないけど、その響きは気に入った。ボクは嬉しい。だからいっぱい尻尾を振る。

「どうやら気に入ったようですね」

真パパが一生懸命振ってるボクの尻尾をぺしぺし叩く。遊ぶのは好きだけど、遊ばれるの気に入らないので、真パパの手に報復のた

め、噛み付く。真パパには少しくらい歯を立ててもいいんだ！

「こらプラム。少しは遠慮しろ」

怒った口調で言うけど、真パパの眼は笑ってるからいいんだ。本気では噛み付かないし。真パパが本当は喜んでるのも、ボクは知ってるんだ。

「お腹すいたでしょう？ ご飯にしようね」

秋代ママのご飯は美味しいから大好きだ。ボクは嬉しくって、もつと尻尾を振る。

「藤村さんも、どうせなら夕飯食べていきませんか？」

秋代ママは最初は真パパのこと好きじゃなかったのに、今は真パパが好きみたいだ。声が優しい。

ボクはやっぱり悔しくなって、真パパの膝から降りて、秋代ママの履いてるスリッパに噛み付いた。

「こらこら、踏んづけちゃうぞ〜お」

秋代ママがスリッパでボクを踏もうとする！ ようし、勝負だ！場所をキツチンへと移動しながら、秋代ママの足には歯を立てないように、ボクはスリッパを攻撃する。

キツチンでボクと秋代ママが遊ぶのを、真パパが嬉しそうに笑って見ている。

「ご迷惑になるし、そろそろ帰りますよ」

なんだと！ せっかく秋代ママがご飯を作ってくれるのに、帰る気か？ おのれ真パパめ、許さないぞ！

ボクは攻撃目標を変えて、真パパのズボンの裾に噛み付いた。

「こらっ！ スーツは駄目だって言っただろっ」

あっ、そうだった。ボクは慌ててズボンを離れた。スーツの時は真パパの服は攻撃したらいけないんだ。

「ほら、プラムも帰って欲しくなさそうですよ。一人じゃつまらないし、迷惑でなければ食べていってください」

クスクス笑う優しい声に、ボクは嬉しくて尻尾を振る。

「それじゃあ、お言葉に甘えて、ご馳走になります」

真パパも本当は帰りたくなかったんだ。ボクを撫でる手が、嬉しそうなもの。

ボクは真パパの手にじゃれ付きながら考える。早く皆で暮らせるようになりたいな。早くこの「まんしょん」に、真パパと一緒に住むようになるといいな。

僕は知ってる。真パパと秋代ママはボクの飼い主なんだ。まだ今はバラバラだけど、真パパと秋代ママは「はんりょ」ってやつなんだ。そういう匂いがするもの。

秋代ママを初めて見た時、ボクには判ったんだ。秋代ママはボクと、ボクの大好きな真パパを幸せにしてくれるんだ。

だから、ボクは秋代ママのそばにいる。秋代ママのそばで、真パパの代わりに秋代ママを守るんだ。

悪いことから秋代ママを守るのが、ボクの仕事。

まだ小さい僕の今の仕事は、「寂しい」と「退屈」をやつつけること。

出来るだけたくさん秋代ママと遊んで、出来るだけたくさん真パパを引き止めてあげなきゃ。

大好きな人（後書き）

とりあえず、ここで一区切りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804z/>

犬とファンデーション

2011年12月25日00時46分発行